

用語の解説

あ行	アデス	気象庁本庁と官署間、気象庁と外部機関との間の気象情報の収集・配信及び予報警報等の作成支援を行うための通信システムであり、当該システムはアデス東日本システム、アデス西日本システム、アデス東補完システム、アデス西補完システム及びアデス開発評価システムからなる気象情報伝送処理システム、端末システム、ネットワーク機器、アクセス通信端末システム及び通信端末システムによって構成される。
	アンサンブル予報システム	長期間の予測において、初期値に含まれる誤差、観測データや数値予報モデルの解像度の制約等により時間の経過とともに誤差が拡大することに対処するため、数値予報モデルにおいて、少しずつ異なる初期値を多数用意することで複数の予報を同時に行い、その平均やばらつきの程度といった統計的な性質を利用して、最も起こりやすい現象を予報するものである。
	一次細分区域	府県天気予報を気象特性、災害特性及び地理的特性により分割した区域であり、天気予報はこの区域ごとに発表される。
	ウィンドプロファイラ	レーダーの一種で、地上から上空に向けて電波を発射し、大気中の雨粒や塵、埃などによって反射し、戻ってくる電波を受信・処理することで、上空の風向・風速を測定する機器のことであり、「観測局」とは、空中線装置（アンテナ）、高周波増幅器等を収容したモジュール収容架、送受信部、データ処理部等で構成されるウィンドプロファイラを設置した施設のことである。
	Xバンドマルチパラメータレーダーネットワーク（XRAIN）	国土交通省水管理・国土保全局が、適切な河川管理や防災活動等に役立てるために整備を進めているレーダーネットワークであり、Xバンドレーダーは、気象庁などのCバンドレーダーよりも高精度な降雨強度推定が可能となっているが、観測半径が短い傾向があること、電波の特性により、強い降水が発生している場合、当該地域の後ろを観測することが困難となることから、レーダーネットワークの構築によりカバーする必要があるものとなっている。
か行	雷ナウキャスト	雷監視システムや気象レーダー観測などにより、雷の激しさや雷の可能性を1km格子単位で解析し、その1時間後までの予測を行うものであり、雷雲の移動方向に盛衰傾向を考慮して、活動度（1から4までの4段階）として示すものである。
	気象	大気（電離層を除く。）の諸現象をいう。
	気象庁マグニチュード	地震時の地面の動き（変位）の最大値から計算される変位マグニチュード及び地面が動く速度（速度）から計算される速度マグニチュードを併用したもの。マグニチュード3程度までは変位マグニチュードを用いた計算が難しいことから速度マグニチュードを利用し、それ以上については変位マグニチュードを用いて発表を行う。 短時間で計算でき、計算結果もモーメントマグニチュードと概ね一致するが、マグニチュード8を超える巨大地震については、正確な数値の推定が困難なものとなっている。
	局地数値予報システム	平成24年8月から本運用を開始した、日本と周辺地域を予測領域として、2kmの解像度で、9時間先までの予測を行うものであり、メソモデルよりもさらに規模の小さな現象を予測することが可能となっており、目先数時間程度の局地的な大雨が発生する可能性を把握し、注意報、警報等を作成することに利用されている。

	警報	重大な災害の起るおそれのある旨を警告して行う予報をいう。
	降水短時間予報	毎時間の降水分布から降水域の移動速度を割り出し、直前の降水分布を移動させて、6時間後までの降水分布を予測するものであり、予測時間の後半には、数値予報の結果も加味されている。
	降水ノウキャスト	レーダーやアメダス等の雨量計によって観測したデータから、1km格子単位で1時間後までの降水の強さの分布及び降水域の移動等を予測し、降水の強さの分布を示すものである。
	豪雪地帯	豪雪地帯を指定した件（昭和38年総理府告示第43号）及び特別豪雪地帯を指定した件（昭和46年総理府告示第41号）において、豪雪地帯及び特別豪雪地帯が指定されている、北海道、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、栃木県、群馬県、新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、滋賀県、京都府、兵庫県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県を指す。
さ行	週間アンサンブル予報システム	全球数値予報モデルを基に解像度を40kmとしたものを使用して、264時間先までの、27の初期値による27の数値予報を同時に行うものであり、週間天気予報の作成に利用されている。
	初期値	数値予報モデルで予測を開始する時刻の大気状態を表すデータのことである。
	水象	気象又は地震に密接に関連する陸水及び海洋の諸現象をいう。
	全球数値予報システム	地球全体を予測領域として、20kmの解像度で表現し、264時間先まで予報するものであり、高気圧や低気圧、台風等、規模の大きな現象の予測に適しており、天気予報（今日、明日、明後日の予報）の作成等に利用されている。
た行	台風アンサンブル予報システム	全球数値予報モデルを基に解像度を40kmとしたものを使用して、132時間先までの、25の初期値による25の数値予報を同時に行うものであり、台風予報の作成に利用されている。
	台風ボーガス	台風周辺の観測データの不足を補うことを目的として、データ同化に利用する疑似観測データであり、気象庁本庁が衛星画像等から解析した中心位置・中心気圧等から経験式に基づいて海面気圧及び風の三次元分布を算出して作成している。
	多機能型地震計	緊急地震速報の実用化を目的として整備された地震計で、搭載されたCPUにより、単独で地震の規模や位置を推定する機能など、多くの機能を有するものである。
	竜巻注意情報	積乱雲によってもたらされる落雷や降ひょう、竜巻やダウンバーストなどの突風による被害を対象とした注意報である雷注意報が既に発表されている場合であって、なおかつ竜巻のような激しい突風の吹くおそれが一段と高まった時に発表される気象情報であり、竜巻発生確度ノウキャストにおいて発生確度2が予測された地域に発表されるものである。
	竜巻発生確度ノウキャスト	気象ドップラーレーダーなどにより竜巻が発生する可能性を推定することにより、10km格子単位で1時間後までの予測を行うものであり、発生確度（1及び2の2段階）として示すものである。
	地象	地震及び火山現象並びに気象に密接に関連する地面及び地中の諸現象をいう。
	地方予報区	府県予報区を地方単位でまとめた区域である。
	ドップラー	気象レーダーをドップラー化することにより、雨や雪など降水の分

	レーダー	布の観測に加え、発射した電波の周波数と電波が降水粒子に反射して戻ってきた電波の周波数との差（ドップラー周波数）を測定することで、降水粒子が位置する地点の「風の流れ（ドップラー速度）」を観測することが可能となり、積乱雲の発達等を捉えることができるものである。
は行	府県天気予報	一般的に天気予報と呼ばれるもので、都道府県をいくつかに分割した単位で、毎日5時、11時、17時に発表され、今日・明日・明後日の天気と風と波、明日までの6時間ごとの降水確率と最高・最低気温の予報を行うものである。
	府県予報区	天気予報の発表区域のうち都道府県単位の区域であり、北海道については7区域に、沖縄県については4区域にさらに細分されている。
ま行	マグニチュード	「震度」がある場所での揺れの強さを表すのに対し、地震が発するエネルギーの大きさを対数で表した指標値である。
	メソ数値予報システム	日本と東アジアの一部地域を予測領域として、5kmの解像度で表現し、39時間先まで予報するものであり、全球システムよりも高い解像度を有することから、集中豪雨等、より規模の小さな現象を予測することが可能となっており、注意報、警報等の作成に利用されている。
	モーメントマグニチュード	地震の原因である岩盤のずれの規模を基にして計算したマグニチュードであり、通常のマグニチュードが正確に表せない規模の大きな地震に対しても有効であるが、高性能の地震計のデータを使った複雑な計算が必要なため、地震発生直後に迅速に計算することや、規模の小さい地震で精度よく計算することは困難なものとなっている。
や行	予報	観測の成果に基づく現象の予想の発表をいう。
	予報作業支援システム（YSS）	警報・注意報や天気予報などの予警報業務を実施するに当たり、部外に提供する電文等のプロダクトの編集及び送信を行うためのシステムである。
ら行	例年値	<p>降水の有無の適中率、最高気温及び最低気温の予報誤差について、現在の形式による府県天気予報の統計検証が開始されてから今日までの間で、全国的に年間を通じた検証結果が入手可能な平成4年から25年までの値を平均したものである。</p> <p>例えば、降水の有無の予測に当たっては、地域ごとに、局地的大雨などの予測が難しい現象の発生の多寡による年ごとの適中率の変動が生ずる。このため、季節的、地域的な精度の違いを説明する場合には、例年値のような長い期間の平均を用いるなどして、年ごとの変動を取り除く必要がある。</p>